

「バウハウス」フォーラム

バウハウス創立 100 周年に向けて

第 1 回

7 月 20 日 (金)

18:30~21:00

渋谷区
文化総合センター

総論

田中辰明氏 お茶の水女子大学名誉教授

バウハウスは 1919 年にドイツのヴァイマルに設立された写真、工芸、陶芸、デザインなどを含む美術と建築の総合的な教育を行う国立の学校であった。その後 Dessau、ベルリンと教育の場を移動し、1933 年には台頭したナチスによって閉校を余儀なくされた。この間わずか 14 年間であったが、教育にあたった教員の豪華さには圧倒される。合理主義的、機能主義的な芸術を目指し、モダニズム運動を行った。しかしバウハウスの 14 年間の存続期間はヴァイマル共和国の時代と一致する。

ヴァイマル共和国はヴァイマルで憲法の草案が作られた事からその名がついている。憲法は極めて民主的で女性に参政権が与えられた。バウハウスはこの時に発足した国立の学校であったため、女性の入学志願者が多かった。それまで大学で学ぶ女性は極めて稀であった。初代校長のグロピウスは予想しなかった事に大いに驚いたが、入学を許可した。その結果女性は織物、染色などの技術を習得し、社会進出を果たした。バウハウスの教員になった女性もいる。ヴァイマル共和国は民主的な憲法を持つ理想国家のように見えたが、政権がよく交替し、不安定な国家であった。また天文学的なインフレーションが発生し、一般庶民は生活苦にあえいだ。一方でこれをうまく活用し、利益を得たものもいて、貧富の差が大きくなった時代であった。

バウハウスもヴァイマル共和国の光と影の影響をまともに受けた。バウハウスの教授陣の名声は素晴らしいものがある。中でもパウル・クレー (Paul Klee)、オスカー・シュレンマー (Oskar Schlemmer)、ヴァシリー・カンディンスキー (Wassili Kandinsky)、ライオネル・ファイニンガー (Lyonel Feininger) などはこの時代を代

「バウハウス」フォーラム

バウハウス創立 100 周年に向けて

表する芸術家である。これに加え、芸術教育に力を入れた教員がいる。ヨハネス・イッテン (Johannes Itten)、ヨーゼフ・アルバース (Josef Albers)、ラスロ・ナホギ＝ナギ (Laszlo Moholy-Nagy) 等がいた。ヨハネス・イッテンは最初に教育学を学びその後絵画を勉強している。

芸術は天性のものと考えられていた時代に、教育によってある程度の域に達することが可能であるとした。彼らの業績は現在も芸術教育に大きな影響を与えている。これに加えて初代校長はヴァルター・グロピウス (Walter Gropius)、3 代目校長はミース・ファン・デル・ローエ (Ludwig Mies van der Rohe) で、この 2 名は近代の 4 大建築家に名を連ねる。こうなると、二代目の校長ハネス・マイヤー (Hannes Meyer) の影がどうしても薄くなる。しかしハネス・マイヤーは校長として精密な教育プログラムを作り、自らも素晴らしい作品を残している。マイヤーは、グロピウスにより、1927 年 4 月に招へいを受け、かつグロピウスの後任校長にグロピウス自身が 1928 年初頭に指名している。しかし実際にはグロピウスとマイヤーの折り合いは悪く、Bauhaus 内での文書にも活動があまり出てこない。グロピウスとマイヤーの折り合いが悪くなった原因はグロピウスの事務所には仕事が入るのに、マイヤー率いる建築学部には仕事が入らなかったという事がある。これらの事がマイヤーの影を薄くしている一因と考える。マイヤーはもっと評価されてよい建築家である。バウハウスは突然ワイマールの地に姿を現したのではない。1870 年ころ、ドイツの芸術工業は英国より立ち遅れていた。1896 年ヘルマン・ムテジウス (Hermann Muthesius) が英国に留学し、「田園都市の考え方、芸術工芸、工芸学校の思想」を持ち帰った。ムテジウスは 1907 年にドイツヴェルクブンド (Deutsche Werkbund) を立ち上げた。

その目的とするところは「芸術家、産業界の企業家、職人の協力を通して、産業製品を発展させること」であった。すなわちそれまでドイツ製品は英国製品より品質が劣ると考えられていたが、ドイツ製品も輸出にかなう「優良品」にしていくことであった。ドイツ

「バウハウス」フォーラム

バウハウス創立 100 周年に向けて

ヴェルクブンドにはブルーノ・タウト（1910 年入会）、ヴァルター・グロピウス（1912 年入会）も参加し、活発な活動を行った。ブルーノ・タウトが活躍した時代とバウハウスが活動した時代は一致する。しかしブルーノ・タウトはバウハウスで教鞭をとったこともないし、別の活動のように考えられていた。ブルーノ・タウトは芸術研究会の機関誌「建築プログラム」（“Ein Architekturprogramm”）に建築に際しあらゆる芸術が協調すべきこと、さらに大衆のための建築の試作と展示会の開催が重要であることを訴えた。タウトは「なぜなら工芸と彫刻、そして絵画の間には境界はなく、すべては一つのものであり、建築をしていくことである」と述べている。

グロピウスは「共に作り上げよう、未来の新しい建築を。それはすべて同じ形態をとるであろう。建築も、彫刻も、そして絵画も」と述べている。明らかにタウトの考えがグロピウスに影響を与えたと考えて良い。またバウハウス発足にあたり、グロピウスはバウハウス宣言とも言われるマニフェストを発表している。その表紙はライオネル・ファイニンガーによる木版画で、大聖堂が描かれ、その塔の先端には絵画、彫刻、建築の 3 つの芸術を示す星が輝いている。ブルーノ・タウトは 1919 年に著した「都市の冠」でゴシックの大聖堂の塔を描いている。これはグロピウスのマニフェストに影響を与えている。最近ではタウトがバウハウスで講演を行った記録も発見されている。ミース・ファン・デル・ローエはナチスが政権を取った数ヶ月後 1933 年に厳しい弾圧を受け、苦渋の選択によりバウハウスを閉校した。バウハウスの教授人の多くは主に米国へ亡命し、そこで大きな影響力を持つようになる。ヴァルター・グロピウスとマルセル・ブロイヤーは建築家として、またハーバード大学教授として建築学を教授する。ミース・ファン・デル・ローエはシカゴで鉄とガラスの超高層建築を建設し活躍した。ヨーゼフ・アルバーズはブラック・マウンテン・カレッジで教鞭をとり、ラスロ・モホリ＝ナギは 1937 年シカゴにニューバウハウスを設立している。

「バウハウス」フォーラム

バウハウス創立 100 周年に向けて

その他外国へ逃げそこで成功したバウハウス関係者は多い。しかし全てのバウハウス関係者がドイツを去ったわけではない。ナチスに追われ、海外逃亡を果たしたくてもできなかった人もいる。中にはナチスの犠牲となり処刑されたバウハウス関係者もいる。また自分が生きるために止む無くナチスに迎合してしまった人もいる。1929年にバーゼルで開かれたバウハウスデッサウの展示会ポスターは秀逸である。これはフランツ・エーリヒにより作られた。ドイツに残った彼は一旦ブッヘンヴァルト（現在はヴァイマル市）の強制収容所に収監される。しかし彼はもとバウハウスにいた人間であることを名乗り、強制収容所の設計に従事する。強制収容所の門扉は氏の作品である。こうして生き延びたことにより旧東独で活躍することができた。バウハウスの全貌は非常に多岐にわたる。このフォーラムでは、今後2ヶ月に一度の頻度でバウハウス各分野の研究者により講演が行われる。ご期待いただきたい。

以上

「バウハウス」フォーラム

バウハウス創立 100 周年に向けて

